山口大学教育学部研究論叢　第72巻　95頁～105頁　2023年1月

近代化と国民文化形成における音楽教育の役割

石井　由理*

The Role of Music at School in the Modernization and the Formation of National Culture

ISHII Yuri*

（Received September 22, 2022）

本稿の目的は、植民地であったアジアの国が近代国家として独立し、国民形成をしていく過程の中で学校の音楽教育がはたしてきた役割を、シンガポールとインドネシアの事例の比較をとおして考察することである。近代とは常に更新されるものであり、よって19世紀後半に近代国家への転換をはかった日本と、20世紀後半に近代国家として独立したアジアの国々が取り入れた近代は同じものではない。本稿では、シンガポールとインドネシアに着目し、近代化と西洋化が同義であった時代に国民の音楽文化として西洋芸術音楽の普及をはかった日本と、文化相対主義の時代に国家となった両国の国民の音楽文化と音楽教育をめぐる認識と選択の違いを論じていく。

はじめに

ナショナリズムは近代がもたらした産物であり、資本主義の発展と大きく関わっているとされる（Giddens, 1990；ゲルナー，2000）。産業革命後のヨーロッパでは、都市の工場で働くために各地の農村から人々が集まってきた。彼らが共に働くために共通の言語が必要になり、その言語は共通の書きことばとなって連帯感を生んだ。この共通の書きことばは、やがて国家によって採用され、学校教育をとおして普及がはかられた（ゲルナー，2000；Anderson，2006）。こうして国民国家の構成員たる国民が作り出されていったのである。アンダーソン（Anderson，2006）は、前者の民衆の間に生まれた連帯感をpopular，vernacular-based nationalism（大衆の俗語に基づくナショナリズム）、後者の国家によって作り出された国民意識をofficial nationalism（公定ナショナリズム）と呼んでいる。

公定ナショナリズムの普及は、学校における言語教育だけでなく、音楽教育でも行われた（Hobsbawm, 1990；Cox，2010）。その際に国民意識を高める役目を担ったのは歌の歌詞であり、学校音楽教育には国民の愛国心の涵養や道徳教育のほかに、共通の書き言葉の普及という側面もあったことがうかがえる。

このように、ヨーロッパにおける近代は工業化とともに始まり、共通言語の教育をとおした国家による国民形成という過程を経たが、アジアでは状況が異なる。19世紀のアジアでは、近代化するということは西洋化とほぼ同じことを意味し、工業化や共通言語だけでなく、その他の西洋の制度や文化も近代国民国家形成に必要不可欠な一要素として「近代化」というパッケージとして取り入れられたのである。

近代化のはじめから学校教育を取り入れ、20世紀初めにはほぼ全国民が初等教育を受けるようになった日本では、「唱歌」という科目の中で、標準的な日本語で書かれ、教育的な内容の歌詞をもつ歌を児童に教えた（Ishii, 2018）。さらには、音楽そのものも、西洋芸術音楽を近代社会の普遍的な音楽ととらえ、民衆の音楽文化を西洋式の音楽に変容させるべく、学校で音楽教育を実施した。19世紀の日本にとって、西洋芸術音楽の普遍性こそ日本国民が身に付けるべき音楽文化であったし、一世紀を経た現在でもそれはほとんど変わっていない（石井，2004）。

一方、19世紀の時点では植民地であったシンガポールやインドネシアは、20世紀半ばから後半に独立したが、それまでどの国の植民地であったかによって国境線が引かれ、国家の領土が定められた。ヨーロッパのように資本主義が発展し、共通の言語が誕生して国民が形成されたのではなく、先に物理的な領土が決まってからそこに住んでいた人々が国民となったのである。この点におい

＊ 山口大学教育学部，〒753-8513　山口市吉田1677－1，yuri@yamaguchi-u.ac.jp

ては、やはりヨーロッパから近代を取り入れたアジアの国であっても、近代化を始めた時点で既にほぼ国民と共通言語が定まっていた日本とは異なっている。

ギデンス（Giddens，1990）やルーマン（Luhman，1997）の言うように、時間の最先端が更新され続ける中で最新の近代の状態が過去を反映して変化し続けているのであれば、20世紀半ばに独立国となったシンガポールやインドネシアにとっての近代は、19世紀の日本にとっての近代とは異なることが考えられる。そこではどのような近代国家となることを目指し、どのような国民形成を試みてきたのか、その中で言語と音楽教育はどのような役割を果たしてきたのか、本稿では、日本とは異なる時代に近代国家形成のプロセスを経験したこれら二国における学校音楽教育をとおした国民文化形成とはどのようなものかを考察していく。

シンガポールの建国と言語政策

シンガポールが英国の植民地となったのは、1824年のことである。マレー半島南端に位置する島であるシンガポールは、貿易の拠点として発展し、中国やインドからも労働者が流入したため、華人の数がマレー人の数を上回るようになった。20世紀後半になって英国から独立するにあたっては、マレー人中心の国家建設をめざすマレーシアが華人の多いシンガポールを国内に抱えることを嫌ったためにマレーシア連邦から切り離され、シンガポール単独で独立国家となったという経緯がある。1965年に首相をはじめその住人が望まないままに独立国家となったシンガポールでは、国民となった華人、マレー人、インド人のアイデンティティは華人、マレー人、インド人のままであり、シンガポール・ナショナリズムは存在しなかった（Velayuthum，2007：10）。

イギリス植民地から自治領となり、マレーシア連邦の一員となり、やがて独立国となったシンガポールであるが、言語および文化に関しては自治領への準備段階から一貫して、華人、マレー人、インド人を平等に扱い、彼らを束ねる共通言語として英語を位置づける政策をとっている。自治領となる前の1956年には英語、マレー語、中国語（北京語）、タミル語を公用語としたが、当初はマレー社会の一員として独立する前提であったので、マレー語を国語とし、国歌もマレー語の曲を選んでいる（Gopinathan，2013：70；Gopinathan & Mardiana，2013：18）。マレーシアと決別した後の1966年にはバイリンガル政策が導入され、マレー語、中国語、タミル語のいずれかと英語の二つの言語の学習がシンガポールのすべての子どもに義務付けられた。このバイリンガル教育は子どもにとって負担が大きいことから、1980年代になると一言語のみでも可とするルートも設けられたが、基本はやはり二言語の習得であり、中等教育、高等教育と進むに従って英語の重要性が増すため、現在ではむしろ英語の方を第一言語とする世代が存在する。

このような言語をめぐるシンガポール社会の複雑なナショナリズムを、カムワンガマル（Kamwangamalu，1993）は図１のようにまとめている。

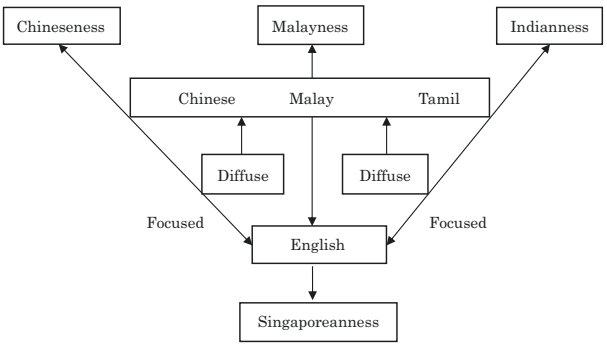

図１　シンガポールの言語とアイデンティティ
出典：Kamwangamalu，N.M.（1993）. Multiligualism and social identity：The case of Singapore. *IDEAL,* 6.

図の上部にあるChineseness，Malayness，Indianness はシンガポールのそれぞれの民族がもつ華人アイデンティティ、マレー人アイデンティティ、インド人アイデンティティである。シンガポールはマレーカンポンなどの伝統的な民族のコミュニティを解体し、特定の民族が特定の地域に集住しないような政策を取ったため、これらのアイデンティティは個人に属するものであって地域に属するものではない。彼らはそれぞれ中国語、マレー語、タミル語を話すが、それらの話者が同時に共通語である英語を話すことによって一つの国民としてのシンガポール人アイデンティティをもつのである。冒頭で述べたヨーロッパで生まれたナショナリズムは、互いに近い言語を話す人々がやがて共通の書き言葉を得たことによって誕生したが、中国語、マレー語、タミル語は、互いに全く異なる言語であり、そこからヨーロッパのような大衆の俗語ナショナリズムは生まれなかった。また、個々の言語をさかのぼっていくとそれぞれ異なる国の国民の母語に行きついてしまうため、他国と差別化するためにシンガポール独自の公定ナショナリズムには、これらすべてを含まなくてはならない。そこで国家が英語を共通語として据えることによって、はじめてシンガポールの公定ナショナリズムとしての３民族語＋英語という構図ができあがった。このような公定ナショナリズムを、学校教育を通して徹底していくことになったのである。

シンガポールの音楽教育における公定ナショナリズム

公定ナショナリズムの普及は音楽教育でも行われている。しかし、それをどのように行うかは時代によって

異なり、暗中模索をしながら進めてきたのがわかる。シンガポールの音楽教育の変遷については石井（2017；2018）で詳細に述べているので、ここでは要点のみをまとめる。

独立前のシンガポールには、英国からの西洋芸術音楽の影響を受けた専門的な音楽教育が存在する一方、学校教育では各民族の学校で自民族の童謡などが歌われるのが一般的であった。独立後、1971年に教育省の音楽教科書委員会が出版した『Sing and Enjoy』に掲載された歌は、すべてシンガポール人によって作曲された曲であり、同じ内容の英語版、中国語版、マレー語版の教科書が１冊にまとめられたような体裁となっている。異なる母語を持つ国民が、同じ曲を国民文化として共有することを目指したことは明白である。しかし、これらの曲は確かにシンガポールにしかない独自の曲ではあるが、逆に多くはどの民族にとっても馴染みのない曲であった。これ以降に出版された教科書では、このアプローチは採用されていない。

1980年代以降の教科書は、西洋音楽理論に基づいたミュージック・メイキングの考えを取り入れ、それをシンガポール人が身に付けるべき音楽の普遍性としつつ、掲載する曲にはそれぞれの民族コミュニティで歌い継がれてきた歌や英国の童謡をはじめとする西洋の曲、独立記念日のためのナショナル・デイ・ソング等新たに作曲された曲などを取りまぜて、公定ナショナリズムを推進している。1990年代から英語の重要性、ビジネスとしての芸術分野が注目されるにしたがって、英語の歌やミュージカル、映画音楽、ポップスなどの欧米の商業音楽の占める割合が多くなってきている（Kong，1999；石井，2017）。カムワンガマルのモデルでいえば、英語を話すシンガポール人というアイデンティティの方向性が強くなっているのであるが、それは英語が世界を市場としたグローバル・ビジネスの展開のために有利だからである。2000年には政府によって国会で「ルネッサンス・シティ・レポート」が発表され、21世紀のシンガポールの文化政策が提唱されている（The Advisory Council on Culture and the Arts，2000）。グローバル化は近代化の延長線上にある（Giddens，1990）と言われるが、常に更新され続ける近代の中でシンガポールが取り入れたのは、グローバル化とグローバル言語としての英語、そして大衆商業音楽産業の発展という21世紀に向けての近代であり、それは学校での音楽教育にも影響を及ぼしている。

シンガポール人にとっての国民文化としての音楽

国が展開してきた音楽教育をとおした公定ナショナリズムの普及は、国民にはどの程度浸透しているのだろうか。以下では、筆者が2014年に実施したシンガポールの大学生を対象としたアンケート調査の結果を、カムワンガマルのモデルに照らして見ていく。調査は、National Institute of Educationの小学校教員養成課程に在学していた11人の華人大学生を対象としている。質問項目の一つである「『我が国の音楽』から連想する曲」への回答のうち、２名以上が挙げた曲を表１に示す。

表１「我が国の音楽」シンガポール学生回答

曲名	回答数	備考
Majulah Singapura	8	国歌、マレー語
Home	6	シラバス、ナショナル・デイ・ソング
Munnaeru Vaalibaa	4	シラバス、Sing Singapore、タミル語
Where I Belong	4	ナショナル・デイ・ソング
Singapore Town	3	シラバス、Sing Singapore
Semoga Bahagia	3	シラバス、マレー語
Count on Me Singapore	2	シラバス、ナショナル・デイ・ソング
One People One Nation One Singapore	2	ナショナル・デイ・ソング
Reach Out for the Skies	2	シラバス、ナショナル・デイ・ソング
We are Singapore	2	シラバス、Sing Singapore

出典：石井由理（2017）「音楽文化を通して見たナショナル・アイデンティティー：シンガポールの事例」『山口大学教育学部研究論叢』66（３）、p. 6

これらは国歌、毎年独立記念日を祝うために今年の歌として選ばれるナショナル・デイ・ソング、シンガポール国民共通の音楽文化を育てることを意図して1988年に導入された『Sing Singapore Song Book』に含まれている歌、学校教育のシラバスに記載されている歌唱教材など、いずれも国がシンガポールの音楽として公に認知している曲、つまり公定ナショナリズムを表している曲である。回答者は全て華人であったが、回答にはマレー語曲２曲（うち１曲は国歌）、タミル語曲１曲の歌も含まれ、その他の歌は他の公用語の翻訳版はあるが、基本的に英語の歌詞である。カムワンガマルのモデルでいえば、国歌を含むマレー語の歌２曲とタミル語の歌１曲以外の大多数は英語の歌という、英語へと焦点化（focus）されるシンガポール人アイデンティティの傾向が示されている。しかし、国歌以外のマレー語曲とタミル語曲の存在は必ずしもdiffuse（拡散）を意味しない。回答者が全員華人であるからである。これは華人である

シンガポール人が、自分たちの国の音楽にはマレー語曲とタミル語曲が含まれなくてはならないと考えていることを示しており、それぞれの民族のアイデンティティへ向かうdiffuseよりはむしろシンガポール国民が共有する文化へとfocusする方向だといえる。

このほかに１名のみが答えた曲が９曲あり、うち４曲は『Sing Singapore Song Book』掲載の英語歌詞の曲、２曲はシラバス掲載のマレー語童謡と中国語新謡、１曲はミレニアム祝典テーマのポップス、残る２曲が中国語ポップスである。これらを加えても、中国語ポップス以外は表１の傾向とほぼ変わらない。

次に表２の「『シンガポールの音楽』から連想する曲」への回答を見ると、最多回答曲の一つに「Fried Rice Paradise」が入ったことが「我が国の音楽」への回答との大きな違いである。この歌の歌詞は、通称シングリッシュと呼ばれる言葉で書かれている。シンガポール政府はこの言語を誤りの多い、好ましくない英語の俗語とみなしており、国民には「正しい」英語を使用することを求めている。しかし、大衆はシンガポール人だけが共有する数少ないシンガポール独自文化としてシングリッシュをとらえている。基本的には英語であるが、そこにシンガポールの諸言語の要素が加味されたシングリッシュは、ヨーロッパの場合とは形成のされ方が異なるが、俗語に基づく大衆のナショナリズムを反映した言語なのである。

同じく７人が答えた「細水長流」は、華人がシンガポールの華人の音楽文化として作った新謡というジャンルの大衆歌謡であり、中国語である。これらに対し、「Home」はナショナル・デイ・ソングとして「正しい」英語の歌詞で書かれた曲であり、「Singapore Town」「Where I Belong」とともに公定ナショナリズム普及のための歌である。このように１位の３曲は、シンガポールの大衆の俗語ナショナリズム、回答者たちの華人アイデンティティ、公定ナショナリズムを示す曲であった。また、「我が国の音楽」にも回答があったマレー語の「Semoga Bahagia」、タミル語の「Munnaeru Vaalibaa」のほかにマレー語の童謡が２曲含まれているが、これらはよく知られている庶民的な童謡である。このほかに１名のみが回答したのは、ナショナル・デイ・ソング２曲、ミレニアム祝典テーマ１曲、国歌、ジャズ１曲、シンガポール英語ポップス１曲、中国語ポップス１曲である。

表２「シンガポールの音楽」シンガポール学生回答

曲名	回答数	備考
Fried Rice Paradise	7	シングリッシュポップス、ミュージカル
細水長流	7	シラバス、新謡
Home	7	シラバス、ナショナル・デイ・ソング
Semoga Bahagia	6	シラバス、マレー語
Di Tanjung Katong	4	シラバス、Sing Singapore、マレー語
Singapore Town	3	シラバス、Sing Singapore
Munnaeru Vaalibaa	3	シラバス、Sing Singapore、タミル語
Where I Belong	2	ナショナル・デイ・ソング
Chan Mali Chan	2	シラバス、Sing Singapore、マレー語

出典：石井由理（2017）「音楽文化を通して見たナショナル・アイデンティティー：シンガポールの事例」『山口大学教育学部研究論叢』66（３）、p. 5

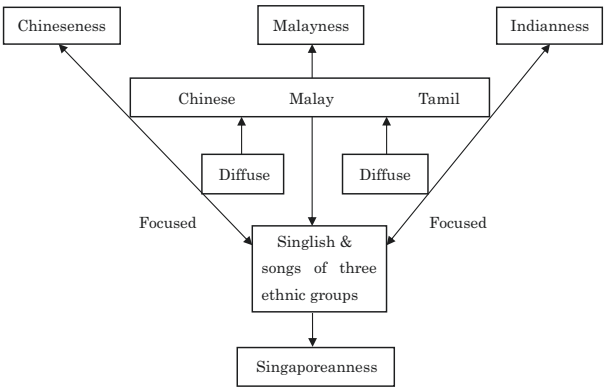

図２　シングリッシュと３民族の歌を共通のアイデンティティとするモデル

「我が国の音楽」への回答と比較すると、各民族の存在を重視する傾向がやや強く、それらをシングリッシュがまとめる焦点化のベクトルが存在している。しかし、「シンガポールの音楽」への回答と同様に、回答者が全員華人であったことを考慮すると、各民族の歌の重視は必ずしも各民族のアイデンティティへの拡散を意味しない。「細水長流」と中国語ポップスが華人アイデンティティへの拡散を示すのみで、他民族の音楽に関しては、それらが含まれてこそシンガポールの音楽だというシンガポール人アイデンティティへの焦点化を意味しており、今回の華人回答者の回答からは、図２のようなモデルを想定できる。

シンガポールは1965年という、世界の価値観が欧米中心から多様な文化の同等な価値の尊重へと変化した時

期に独立をした。しかし、国家として生き残るために植民地時代の英国からの遺産を捨てることなく、音楽文化においては西洋芸術音楽の普遍性、言語文化においては英語をシンガポールのアイデンティティの基盤として活用する選択をした。近代化の延長とされるグローバル化の進む21世紀の政府の戦略は、英語という普遍性の側面をさらに強化しつつ、音楽に関してはビジネスとしてメリットのある欧米の大衆商業音楽を積極的に受け入れる方向へ転じている。

しかし、アンケート調査の結果からは、人々は国家が示すこのような方向性を公定ナショナリズムとして受容しつつも、他方では各民族の多様な文化の共存と彼ら皆で創り出したシンガポール独特の言語であるシングリッシュという他国には見られない特徴に、シンガポールのアイデンティティを見出していることがうかがえる。また、アンケート調査では上記項目以外に彼らが日常でよく聞く音楽も尋ねたが、回答は欧米の英語歌詞の大衆商業音楽の曲が大多数であった。本人たちがもつ「シンガポールの音楽」のイメージに反して、英語で世界とつながっているシンガポールの若者の日常にある音楽文化は、すでにナショナリズムを越えてグローバルな次元に達している。この傾向があるからこそ政府が21世紀のビジネスの世界展開の可能性を欧米大衆商業音楽に求めたとも考えられる。

インドネシアの建国と言語政策

インドネシアは300年以上にわたるオランダの植民地支配ののちに、1945年に独立を宣言、その後オランダとの４年におよぶ独立戦争を経て1949年に完全に独立した国である。広大な空間に広がる17,000もの島々には約490の民族と583を超える言語が存在している（Ministry of Tourism and Creative Economy, Republic of Indonesia，2020）。このように多様なインドネシアが一つの国家として独立したのは、これらの島々がオランダ植民地であったためで、一つの島であるボルネオ島やニューギニア島の真ん中にマレーシアやパプアニューギニアとの国境線が走っているのも、植民地時代の宗主国の違いによるものである。19世紀ヨーロッパの国民国家形成であれば、これらは言語的に近い関係にあるもっと小さな単位でまとまってそれぞれ独立国家となったのであろうが、オランダ領東インドの諸民族がオランダから独立を勝ち取るためには、民族や言語の違いを越えて団結する必要があった。

植民地下の民族運動の中で、インドネシアを一つの国とし、その統一言語をインドネシア語とすることが1928年10月28日の青年の誓いの日に宣言された。そして独立宣言をした1945年の憲法では、インドネシア人を一つの民族とし、インドネシア語をインドネシア共和国の国家の言語とすることが明記された（森山、2009：8；Ishii，Dewi Pangestu Said & Putu Ayu Asty Senja Pratiwi，2022）。

インドネシア語は、異なる言語をもつ島々との交易をするために商人たちの共通言語として使われていたマレー語をもとに創られた言語である。また、植民地時代、オランダ植民地政府は現地人がオランダ語を使うことには消極的であり、現地人の間の共通言語としてマレー語を普及させようとしていた（森山，2009）。このため、新しい国家の統一言語が必要になった時、旧宗主国の言語ではなく、マレー語を整備し、他のインドネシアの言語の要素も取り入れて創ったインドネシア語を国家の言語としたのである。一方、同憲法ではそれぞれの民族集団の言語は「地方語」とされ、インドネシア文化の一部をなすものとして国家によって尊重・保持されるものとしている（森山、2009：10）。

こうして独立後のインドネシアは国家の言語の国民への普及という国家プロジェクトに取り組むこととなった。図３にインドネシアの諸民族の言語とアイデンティティの関係を示す。数が多いため、３言語集団のみ具体的に示している。

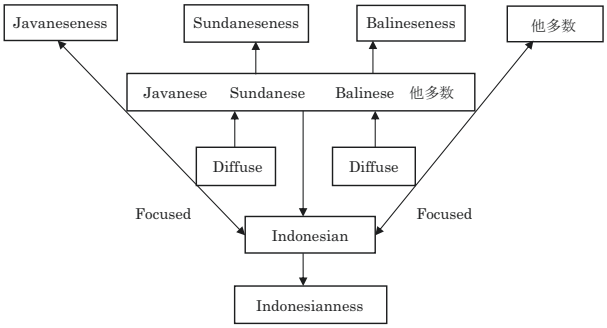

図３　インドネシアの言語とアイデンティティ

インドネシアは国家のスローガンとしてunity in diversity（多様性の中の統一）を掲げてきたが、建国からスハルト政権が崩壊する1990年代末まではインドネシアとしてのunityの方に重点が置かれ、すべてのインドネシア人がインドネシア語を話せるようになるために、学校ではインドネシア語の教育が重視されていた。1954年に出された法律では、一つの民族としての国民意識を強めるために、「すべての学校においてインドネシア語を教授言語とすること」とされたが、小学校の３年生までは地方語を教授言語とすることも認められていた（森山、2009：11）。

言語に関してはインドネシア語ができたが、文化に関しては存在するのは個々の民族の文化であり、その集合体をもってインドネシア文化となる。伝統的な民族文化

の多様性と近代国家の統一性を両立すべく試みられたのは、これらを各地方自治体の地方文化の多様性として国の近代的な行政制度に取り込むことであった。しかし、スハルト政権下でインドネシア語の普及が順調に進む一方で、多様性を担っていた地方語の衰退は予想以上に進み、1970年代には多様性維持の面から危機感がもたれるようになった（森山、2009：15）。

1989年には、教育の制度や内容に統一性を持たせるべく国民教育体系法が改正され、それにもとづく1993年の小学校カリキュラムに関する教育文化大臣決定によって、ナショナル・カリキュラムに付加する形で「地方独自内容」という枠が設けられ、この枠の中で地方語の教育をすることが可能になった（鏡味、2009：102－103）。この枠を採用するかどうかは地方の判断であったが、衰退する地方語を学校教育の中で教えるための枠組みが国によって設けられたことになる。

1990年代後半になるとグローバル化現象の一つである文化の独自性の自己主張が世界各地で盛んに見られるようになったが、1998年のスハルト政権崩壊はこの時期と重なる。1999年には地方行政法（2001年施行）が成立し、それまでの中央集権的な統治制度から地方分権制度へと転じた（長谷川、2018）。しかし、当初、州よりも県や市への権力の移譲が行われた地方分権は、2004年に地方行政法の修正がはかられ、国の代理人としての州の権限が強化され、これ以降、再び州を介した中央集権化への揺り戻しが起きているとされる（長谷川、2018）。県や市による統一性のない地方分権ではなく、国の方針のもと、州が実施する統一性のある地方分権への軌道修正である。

地方語をめぐる言語政策にも、この影響は現れている。2003年の国民教育体系法改正にもとづいて改訂された2004年のナショナル・カリキュラムでは、「地方独自内容」を設けることが義務化され、この中で教える科目の選択肢の中に地方語があった（鏡、2009：100；森山、2009：65；Ishii, Dewi Pangestu Said & Putu Ayu Asty Senja Pratiwi, 2022）。「地方独自内容」をどのように実施するかは各学校が決めることができたが、実際には州の指導に従っていたということである（鏡味、2009：106）。2013年カリキュラムでは教科としての「地方独自内容」はなくなったが、地方独自の内容はB教科群と言われる教科の中に地方政府が付加カリキュラムとして加えることができるようになっている（服部、2021）。地方語教育に関しては、他地域から移住してきた他民族の人たちも、その地域に暮らす以上は地元の言語を習得することが求められる。よって学校での地方語教育は、それを母語とする子どもとインドネシア語に加えての第三言語として学ぶ子どもとを対象とすることになる。こうして地方文化としての地方語を創り出そうとしている。

州政府による地方語の促進は学校教育にとどまらない。例えばバリ州では2018年に公の場でのバリ語の維持のために、バリ語で書かれたもの、バリ語文学の保護とバリ語月間の実施に関する規則を知事が発しているし（Bali Topnews, 2021）、ジョグジャカルタ特別州では社会のあらゆる場でジャワ語で過ごす一日なども設けている（Ishii, Dewi Pangestu Said & Putu Ayu Asty Senja Pratiwi, 2022）。多様性が消えてしまわないように国が枠組みを整え、州が枠組みの中身を埋めている状況である。

インドネシアの音楽教育における公定ナショナリズム

前節では言語における公定ナショナリズムを見てきたが、音楽文化と音楽教育に関してはどうであろうか。

鎖国政策を取っていた日本とは異なり、オランダ領であったインドネシアには、人々の生活を介して徐々に西洋の音楽文化が入っている。独立前のインドネシア社会には、本格的なヨーロッパ芸術音楽ではなく、オランダ人が好んで聞いていた肩の凝らない楽曲と、インドネシア人作曲家による同様の西洋形式の歌が存在していた（McGrow, 2013：28）。

1930年代から50年代には、「インドネシアの音楽」をどのようなものにするかをめぐって論争があり、西洋芸術音楽を取り入れるべきだという主張と、インドネシアの多様な伝統音楽に西洋の要素を取り入れるべきだという主張が対立した（Mack 2007, 64；McGrow 2013, 54）。この論争には結論は出ず、独立後に日本のように近代化の一部として政府が意図的に西洋芸術音楽を取り入れて国民の音楽文化を変容させるプロジェクトを始めることもなかった。このように、インドネシアは、近代国家となる際に国民の音楽文化の基盤に西洋芸術音楽を取り入れなかった点で日本やシンガポールとは異なる選択をしている。

1950年代になると西洋からロックやポップスなどの大衆商業音楽が流入した。これに対し当時のスカルノ大統領は西洋文化排斥の姿勢を取り、インドネシア民族文化の振興をはかろうと、インドネシアポピュラー音楽フェスティバルの課題曲に各地方の音楽を課すなどして、国民文化創出を試みたが（田子内、2012、117－120）、スカルノ失脚とともに再び方向性は変わり、西洋の大衆商業音楽が流入する時代になる。現在のインドネシアでは、西洋のロックやポップスだけでなく、レゲエやインド映画音楽の影響を受けた様々な大衆商業音楽が聴かれているが、西洋芸術音楽は浸透していない。

学校における音楽教育は、国による全国統一基準を

定めた前述の1989年の教育体系法の中の小学校教育の標準カリキュラムでは「工芸・芸能」として取り入れられ、2003年改正の同法ではこれが「芸術文化」となり、2006年の国民教育大臣令の標準科目構成では「芸術文化・技能」という一般科目の中に、美術や芸能とともに含まれている（森山、2009：99－100）。このほか、「地方独自内容」の中で地方芸能が教えられることもあり、鏡味（2009：104－105）は、バリ州の中学校や西ジャワ州の小学校でのガムラン音楽、その他の州の地方芸能や伝統芸能について述べている。ナショナル・カリキュラムは2013年に改定され、音楽はＢ教科群の「文化芸術・工芸」で教えられることになった。Ｂ教科群には他に「保健体育」があるが、先述のように、これらの教科は国が内容を定めるＡ教科群の教科と異なり、国が定めた内容に地方政府が独自の内容を加えることができる（服部、2021）。しかし、2013年カリキュラムは、教育現場が対応できなかったために全面施行はできず、修正を重ねながら今日に至っている。

このようなカリキュラム政策の変遷のもと、実際の学校の音楽教育はどのように行われてきたのか。以下では、筆者が2019年９月にバリ州の音楽教育関係者３名に対して実施したインタビュー調査にもとづいて述べていく。インタビューの対象としたのは私立小学校の音楽専科の教員Ａ氏、芸術大学で音楽を専門とする教員Ｂ氏、学校の課外活動で音楽を教える演奏家Ｃ氏である。

私立小学校音楽専科教員Ａ氏の話

かつては、音楽はナショナル・カリキュラムに入っておらず、付加カリキュラムおよび課外の教育のみであったが、今は芸術も入っている。全国試験もかつてはインドネシア語、算数、理科だったが５年前から芸術も入り、公民、理科、インドネシア語、英語、算数、体育、芸術となっている。

2013年のナショナル・カリキュラムについては、自分は音楽専科なので音楽理論を教えられるが、公立学校では一般の教員が教えるので、歌だけで音楽理論は教えていない。この状況は中等教育でも同じである。音楽理論は、伝統的なペンタトニックスと西洋音階の両方を教える。１、２年生は歌、３年は歌とリコーダー、４年はピアニカを始める。１週間に１コマ70分の芸術の授業では、35分歌って35分絵を描く、というような教え方をしている。このほかに1.5コマの課外活動がある。ナショナル・カリキュラムで教えるのは、教科書に載っている歌と音楽理論である。ナショナル・カリキュラムでは特にバリを強調しているわけではないので、付加授業や課外授業でバリを強調する。西洋の古典音楽やポップス、映画音楽はナショナル・カリキュラムには入っていない。

ナショナル・ソングは必修となっており、３年前からこれらの歌を教えなくてはならなくなった。さらに昨年から毎朝30分、授業前の朝礼でナショナル・ソングと伝統的な歌[1]を歌うようになった。これはナショナル・カリキュラムで決められていて、歌う曲は、他州のものも含めた伝統的な歌、国歌、ナショナル・ソングである。これはインドネシア中の公立・私立全ての学校で実施している。既に存在している歌をナショナル・ソングとして選んで本に載せている。新たにナショナル・キッズ・デイのために作られている歌はあまり人気がない。

課外授業にはコンテストに出たい子どもたちが参加している。バリでは一週間に１度の頻度で、ショッピングモールなどでコンテストがある。どのような歌を歌うかはコンテストによる。

芸術大学の音楽教員Ｂ氏の話

かつては学校のカリキュラムに音楽はなかった。（筆者が見せた）歌集の曲はナショナル・ソングで、私たちはこれを知らなくてはならない。1980年代のカリキュラムでは、子どもたちは放課後にこれらのヒーローや歴史についての歌を歌った。1990年代のカリキュラムでは、前大臣は、西洋的カリキュラムを採用し、芸術の時間を減らしたが、人間関係における寛容性など生徒の道徳心への影響が期待され、2014年にジョコ大統領が芸術の力を信じ、復活させた。

ナショナル・ソングには、*ガルーダパンチャシラ*[2]などが入っている。1980年代には全ての生徒がこれらの歌を歌ったが、1990年代には減少した。1990年代の政策は道徳心に影響していると思う。

必修歌唱教材は道徳心涵養のためのもので、ナショナル・ソングと民謡の二つの種類を含む。インドネシアには（日本のように）教育省が歌を作った歴史はなく、独立時の作品が教育省に採用されて、ナショナル・ソングのコレクションになっている。

学校の課外活動で音楽を教える演奏家Ｃ氏の話

20年くらい前から子どもたちの音楽演奏コンテストがあり、６月に地域選抜が始まって９月に州レベルに進む。バリ人はバリの歌を歌いたいと思うようになった。子どもは伝統的な歌の内容を知りたがるし、親も子どもにバリの歌を学んでほしいと思っている。伝統的といっても作曲者のいる新しいもので、歌詞が伝統的なバリ語である。中学や大学はポップスに流れがちで、生徒たちはコンテストに出てポップ・スターになることを目指している。正課で何を教えているかは知らないが、課外活動では自由に教えられるので、現代的なバリ音楽を教えてい

る。2013年からBali Kamaraという子どものグループを作ってコンテストに出ている。B氏のグループには100人くらいいて、自分のグループには50人くらいのメンバーがいる。Bali Kamaraはバリの音楽を活発にしたパイオニアである。

インタビューの内容からは、ジョコ政権になってからナショナル・カリキュラムにおける音楽の位置づけ、特に道徳心の涵養という観点からの重要性が増していることがわかる。また、音楽専科でない一般の教師は音楽理論の授業を展開できずに、これまでとおりの歌中心の授業を行っていることもわかった。歌唱中心の授業であれば、国家が指定した必修歌唱教材の持つ意味はますます大きくなる。

2017年発行の初等・中等教育用必修歌曲集「Lagu Wajib　SD-SMP-SMA[3]」（Kiki Laisa，2017）には、ナショナル・ソングとして国歌や独立前後に西洋形式で作曲された、インドネシア語の歌詞をもつ愛国的な歌46曲が含まれるほか、インドネシア各地の民謡が全66曲掲載されている。構成としてはインドネシアとしての統一を示すのが前者の西洋的な愛国歌、各地方の音楽文化の多様性を代表するのが後者の地方民謡である。前述の音楽専科教師の話のように自分の住んでいる州以外の地方の民謡も習うということであれば、これら全体をもってすべてのインドネシア人が共通して身につけるべきインドネシアの音楽文化だということになる。それに加えて付加カリキュラムや課外活動の中で自分の州の伝統音楽や大衆音楽を学ぶ教育がなされている。これらを図に示すと図４のようになる。

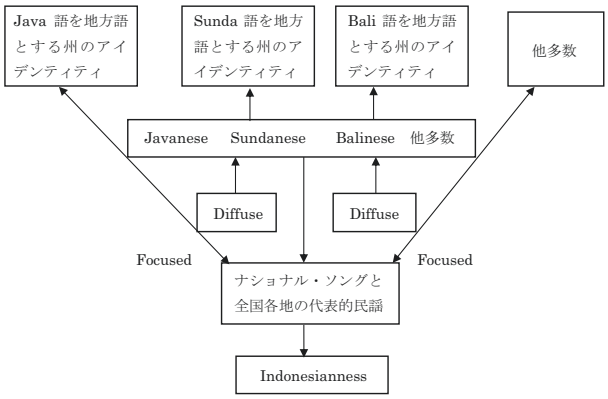

図４　国家による音楽教育をとおした国民文化形成

インドネシア人にとっての国民文化としての音楽

シンガポールの場合と同様に、国の音楽教育の結果、国民がどのような音楽文化を形成しているのかを探るため、筆者は2021年にバリ州の大学を１、２年前に卒業したバリ人アイデンティティの若者53人を対象に同じ質問項目でe-メールによるアンケート調査を行った。表３と４は、回答をジャンル別に集計したものである。

表３「我が国の音楽」ジャンル別回答数

ナショナル・ソング	108
インドネシア・ポップス	48
ダンドゥット	8
クロンチョン	3
ジャズ	2
地方民謡	2
合計	171

出典：石井由理・プトゥ アユ アスティ センジャ プラテウィ（2022）「国民文化形成とローカル・アイデンティティ：バリの若者の音楽認識から見えるもの」『山口大学教育学部研究論叢』第71巻、p.124に加筆、修正。

「我が国の音楽」の回答としてはインドネシア語の歌詞をもつ西洋式音楽の愛国的ナショナル・ソングがほとんどで、地方語の歌詞をもつ地方民謡は２名が回答した１曲にすぎなかった。２位となったインドネシア・ポップスも歌詞言語はほとんどインドネシア語で、多数の回答が集中する曲はなく、地方語に関してはジャワ語歌詞のダンドゥット[4]というジャンルの曲が２曲あるのみであった。つまり「我が国の音楽」として連想されるのは、インドネシア語の歌詞をもつ西洋形式の愛国歌とポップスということになり、言語の面でも音楽の面でも「我が国の音楽」に地方の多様性は出てこない。

次に「インドネシアの音楽」への回答を見ると、ナショナル・ソングは消え、インドネシア語のポップスがほとんどとなる。これは、シンガポールの調査で「シンガポールの音楽」に「Fired Rice Paradise」が選ばれたパターンと似ているが、シングリッシュが政府によって誤った英語とみなされているのに対して、インドネシア語の場合はポップスの歌詞であっても正当なインドネシア語なので、公定ナショナリズムに反してはいない。インドネシア語以外の歌詞をもつものは、西洋ポップス５曲、英語のインドネシア・ポップス２曲、モルッカ語の童謡が１曲で、他にインドネシア語と英語もしくは日本語の混合の曲が全部で７曲ある。このように、「インドネシアの音楽」に対しても地方語歌詞の回答は無いに等しく、若者にとっての「インドネシアの音楽」はインドネシア語のポップスとなっている。インドネシアの音楽文化には愛国歌のほかにすべての地方の民謡が含まれ、すべてのインドネシア人はそれを共有するという現政権の公定ナショナリズムの影響は、20代前半の若者には現れていない。

表４「インドネシアの音楽」ジャンル別回答数

インドネシア・ポップス	198
ダンドゥット	10
クロンチョン	2
ジャズ	10
SKA／レゲエ	1
童謡	1
西洋ポップス	5
合計	227

出典：石井由理・プトゥ アユ アスティ センジャ プラテウィ（2022）「国民文化形成とローカル・アイデンティティ：バリの若者の音楽認識から見えるもの」『山口大学教育学部研究論叢』第71巻、p.124

「郷土の音楽」への回答の比較

最後に「郷土の音楽」に対するシンガポールとインドネシアの回答を比較していく。

シンガポールの調査で２名以上が回答した曲は表５に示すとおりで、国歌が入っている以外は「シンガポールの音楽」への回答と似ている。１名のみが回答した曲は、ナショナル・デイ・ソングが３曲、『Sing Singapore Song Book』掲載曲が５曲（うち１曲はナショナル・デイ・ソングと重複、１曲はマレー語、１曲はタミル語の曲）、マレー語歌詞のシラバス掲載曲が１曲、中国語ポップス３曲、シンガポール英語ポップス２曲、カナダポップス１曲、フランス民謡１曲で、他の二つの質問に対する回答よりはややポップス系の曲が多い。

１名回答まで含めると「我が国の音楽」には19曲、「シンガポールの音楽」には16曲、「郷土の音楽」には22曲の回答があったが、これらのうち、３つすべての質問に重複して回答された曲が９曲あった。この結果から、華人の学生にとっての「郷土の音楽」にも、シンガポールの３民族の歌が含まれるという公定ナショナリズムが浸透していることがうかがえる。

表５　シンガポール学生「郷土の音楽」回答

曲名	回答数	備考
Home	6	シラバス、ナショナル・デイ・ソング
Fried Rice Paradise	4	シングリッシュポップス・ミュージカル
Where I Belong	4	ナショナル・デイ・ソング
Majulah Singapura	2	国歌、マレー語
細水長流	2	シラバス、新謡

出典：石井由理（2017）「音楽文化を通して見たナショナル・アイデンティティー：シンガポールの事例」『山口大学教育学部研究論叢』66（３）、p. 6

これに対するインドネシアの若者の「郷土の音楽」への回答は対照的であった。表６に示すように、回答にはナショナル・ソングもインドネシア・ポップスもほとんどなく、バリの伝統音楽とバリポップスが圧倒的多数を占めた。先述のインタビュー調査によれば、これらの音楽は小学校では付加カリキュラムや課外の音楽教育で教えられる音楽である。中等学校のナショナル・カリキュラムも特定地方の音楽に焦点を当ててはいない。バリ州は特にバリらしさを重視する社会なので、この結果をすべてのインドネシアの州に一般化することはできないが、この調査では、バリの若者にとっての郷土の音楽は、バリの音楽に限定されることが示された。

表６「郷土の音楽」インドネシアジャンル別回答数

バリ伝統音楽	64
ポップ・バリ	63
インドネシア・ポップス	1
ダンドゥット	6
クロンチョン	4
民謡（バンジャール語）	1
ブタウィ・ポップス（ブタウィ語）	1
ジャワ・ポップス	1
バリ童謡	2
合計	143

出典：石井由理・プトゥ アユ アスティ センジャ プラテウィ（2022）「国民文化形成とローカル・アイデンティティ：バリの若者の音楽認識から見えるもの」『山口大学教育学部研究論叢第71巻』p.124

おわりに

本稿では、近代化がもはや西洋化と同義ではなくなった20世紀半ばに独立国家となったシンガポールとインドネシアが、近代国家としてどのような国民形成をめざし、音楽教育をとおしてどのような国民文化を創り出そうとしてきたのかを見てきた。20世紀後半という時代の価値観を反映して、両国とも自国内の多様な民族の言語や文化を尊重する政策を掲げたが、移民国家であるシンガポールが３民族の融合によってシンガポール国民を形成しようとしたのに対し、インドネシアは各地の民族集団を近代的な行政制度の中にはめこみ、その上に国家を置くという国民形成を選んだ。

学校の音楽教育もこれを反映しており、シンガポールでは植民地時代からのヨーロッパ芸術音楽の基盤の上に

３民族の音楽が加わった全体を、国家の音楽文化として全国民に教育してきた。21世紀に入ってからはグローバル化への対応として西洋の大衆音楽文化の価値も認識し、ルネッサンスと称して新たなシンガポールの音楽文化を創り出そうという方向へ向かっている。

他方、インドネシアでは植民地時代にヨーロッパの芸術音楽の影響を受けず、また、近代国家であるために国民文化を西洋化する必要もない時代の独立であったため、国家プロジェクトで音楽文化の西洋化をすることもなかった。学校での音楽の役割は、長らくインドネシア語の愛国歌による道徳教育にとどまっており、諸民族の音楽文化の共有という目的はなかった。この間に一般社会では西洋大衆商業音楽の影響を受けたインドネシアの大衆音楽が生まれており、インドネシア語で歌われるものは国民が共有するインドネシアの音楽であるとともに、近代国家インドネシアを代表する音楽であると認識されている。

このようなインドネシアの学校の音楽教育は、グローバル化時代に入って変わりつつある。音楽はナショナル・カリキュラムの中に入り、国民形成のより重要な役割を担うことになった。そして文化の独自性の尊重が唱えられる時代を反映して、各州は地方独自の音楽を教えられるようになった。2022年現在、学校の音楽教育に期待されているのは、インドネシア語のナショナル・ソングとインドネシアのすべての地方の代表的な民謡を含んだ音楽文化を、国民文化として全国民に浸透させるのと同時に、各地方の音楽文化も維持することである。これは、共通性と地方の独自性が接点なく併存するだけの公定ナショナリズムとは異なり、シンガポールのように共通性の中に多様性が入り込んだ公定ナショナリズムへ向かう方向性を示唆している。

付記：本稿は科学研究費基盤研究（Ｃ）課題番号17K04793「アジアの芸術教育におけるグローバル化と国民文化形成」の成果の一部である。

註

１．地方の伝統的な音楽にも西洋の影響が入っていることが考えられる。

２．ガルーダパンチャシラはインドネシアの国章。神鳥ガルーダにインドネシアの建国５原則（パンチャシラ）のエンブレムを重ねている。

３．小学校、前期中等学校、後期中等の必修歌曲の意味。

４．伝統楽器と西洋楽器の混合で演奏されるインドネシアの代表的な大衆商業音楽。

日本語参考文献

石井由理（2004）「公式の知識としての音楽」『山口大学教育学部研究論叢』54（３）、101－110頁

石井由理（2017）「音楽文化を通して見たナショナル・アイデンティティー：シンガポールの事例」『山口大学教育学部研究論叢』66（３）、１－12頁

石井由理（2018）「音楽教科書から見たシンガポールの国民文化形成」山口大学教育学部附属教育実践総合センター『研究紀要』45号、141－139頁

石井由理・プトゥ アユ アスティ センジャ プラテウィ（2022）「国民文化形成とローカル・アイデンティティ:バリの若者の音楽認識から見えるもの」『山口大学教育学部研究論叢』71巻、119－126頁

鏡味治也（2009）「インドネシアの学校教育に見る国語と地方語」森山幹弘・塩原朝子（編著）『多言語社会インドネシア―変わりゆく国語、地方語、外国語の諸相』めこん、97―120頁

ゲルナー,アーネスト（2000）加藤節（訳）『民族とナショナリズム』岩波書店

田子内　進（2012）『インドネシアのポピュラー音楽ダンドゥットの歴史―模倣から創造へ』福村出版

長谷川拓也（2018）「インドネシア地方自治の点展開―2014年地方行政法と2014年村落法」船津鶴代・龍谷和弘・永井史男（編）『東南アジアの地方自治サーヴェイ』JETROアジア経済研究所、97－111頁

服部美奈（2021）「インドネシアにおける共有価値としての『寛容』の醸成：市民教育と宗教教育の教科書に焦点をあてて」学会創立30周年記念論集編集委員会（編）佐藤千津（編著）『コミュニティの創造と国際教育』明石書店、45―60頁

森山幹弘（2009）「スンダ語の尊重と育成」森山幹弘・塩原朝子（編著）『多言語社会インドネシア―変わりゆく国語、地方語、外国語の諸相』めこん、59－89頁

外国語参考文献

Anderson, B.（2006）. *Imagined communities：Reflections on the origin and spread of nationalism.* London and New York：Verso.

Bali Topnews.（2021）. Governor of Bali Wayan Koster is proud that Balinese script will immediately be parallel to other worldwide script. January 10, 2021. https://balitopnews.com/read/202101100004/governor-of-bali-wayan-koster-is-proud-that-balinese-script-will-immediately-be-parallel-to-other-worldwidescript.html（accessed August 29, 2021）

Cox, G.（2010）. Britain：Towards ‘a long overdue

renaissance'? In Cox, G. & Stevens, R.（Eds.）, *The origins and foundations of music education：Cross-cultural historical studies of music in compulsory schooling*（pp. 15-28）. London：Continuum Studies in Educational Research.

Giddens, A.（1990）. *The consequences of modernity.* Cambridge：Polity Press.

Gopinathan, S.（2013）. *Education and the nation state.* London & New York：Routledge.

Gopinathan, S. and Mardiana, A. B.（2013）. Globalization, the state and curriculum reform. In A. Deng, S. Gopinathan & C.K. Lee（Eds.）. *Globalization and the Singapore curriculum：From policy to classroom*（pp. 13-32）. London & New York：Routledge.

Hobsbawm, E. J.（1990）. *Nations and nationalism since 1780.* Cambridge：Cambridge University Press.

Ishii, Y.（2018）. The roles played by a common language and music education in modernization and nationstate building in Asia. *Espacio, Tiempo y Educación,* 5（2）, 55-76.

Ishii, Y. , Dewi Pangestu Said & Putu Ayu Asty Senja Pratiwi.（2022）. Localization, nationalization, and globalization reflected in the music-listening habits of young Balinese. 『山口大学教育学部研究論叢』72巻、127－135頁

Kamwangamalu, N.M.（1993）. Multiligualism and social identity：The case of Singapore. *IDEAL,* 6.

Kiki Laisa.（2017）. *Panduan kengkap lagu wajib SD-SMP-SMA.* Semarang：Yanita.

Kong, L.（1999）. Cultural policy in Singapore：Negotiating economic and socio-cultural agendas. *Geofurum,* 31（4）, 409-424.

Luhman, N.（1997）. Globalization of world society. *International review of sociology.* 7（1）, 67-79. https://www.tandfonline.com/doi/abs/10.1080/03906701.1997.9971223（accessed February 13, 2015）

Mack, D.（2007）. Art（music） education in Indonesia：A great potential but a dilemmatic situation. *Educationist.* 1（2）, 62-74.

McGrow, A. C.（2013）. *Radical traditions：Reimagining culture in Balinese contemporary music.* New York：Oxford University Press.

Ministry of Tourism and Creative Economy, Republic of Indonesia（2022）. https://visitindonesia.jp/info/index.html（accessed August 23, 2022）

The Advisory Council on Culture and the Arts.（2000）. *Renaissance City report：Culture and the arts in Renaissance Singapore* https://www.nac.gov.sg/docs/default-source/resources-files/arts-masterplan/arts-and-culture-strategic-review-（2012）/renaissance-city-report-1-（rcp1）.pdf?sfvrsn=8bd6451d_2（accessed September 3, 2022）

Velayutham, S.（2007）. *Responding to Globalization.* Singapore：Institute of Southeast Asian Studies.